

菊池飛行場給水塔の文化財指定

肥後考古学会幹事 高谷 和生

菊池市の菊池(花房)飛行場給水塔が、アジア太平洋戦争期の戦争遺跡として県内で初めて、有形文化財指定を受けた。給水塔の歴史的価値と活用や継承の方法などについて、保存活用運動にかかわってきた肥後考古学会幹事で「花房飛行場の戦争遺産を未来につたえる会」事務局長の高谷和生さんに寄稿してもらった。

戦後65年、今年ほど戦争の新たな証言が見聞されたことはなかった。戦争体験を持つ世代は、国民の2割を切っており、あと十数年もたれば語りもこと自体も途絶えてしまつてあつたらう。さきの戦争の記憶は確実に風化しつつある。体験者にとつては、どうしても伝えなければならぬ機会であつた。

戦後65年、今年ほど戦争の新たな証言が見聞されたことはなかった。戦争体験を持つ世代は、国民の2割を切っており、あと十数年もたれば語りもこと自体も途絶えてしまつてあつたらう。さきの戦争の記憶は確実に風化しつつある。体験者にとつては、どうしても伝えなければならぬ機会であつた。

95年の文化財指定基準の拡大によってアジア太平洋戦争期の戦跡も文化財として指定が可能となり、全国では今年6月時点で171件が指定登録されている(戦争遺跡保存全国ネットワーク調べ)。

今回指定された菊池飛行場をはじめとする県内各地の旧軍飛行場は、優

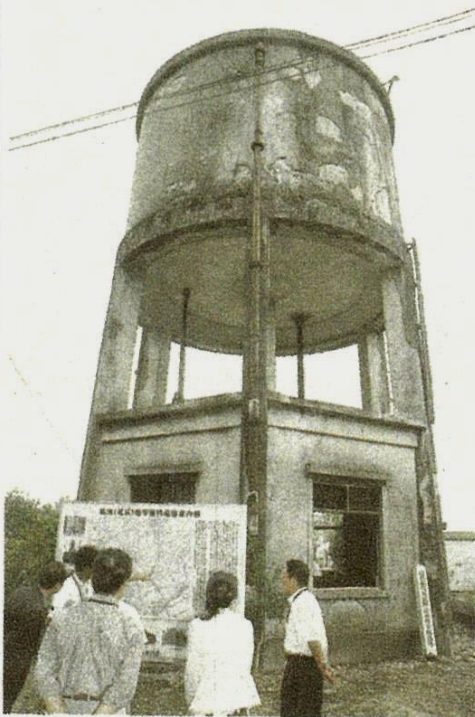
戦争の記憶と平和継承を

良農地等を軍が半ば強制接收し、多くの住民や勤労学徒も建設に従事し、空襲により民間人も亡くなるなど、昭和前半期の歴史を凝縮したモノである。菊池飛行場は1940年開隊。45年5月13日の米軍空襲で多くの軍施設は消滅したが、ここは沖繩への特攻中継基地から本土決戦基地へと変貌した。県内の陸海軍飛行場の中では最大規模で歴史も古く、陸軍航空の歴史は菊池飛行場を抜きにしては語れない。

菊池飛行場のシンボルである給水塔は築70年。鉄筋コンクリート造で全高は13・57m。水槽外壁や柱には空襲時の機銃弾の跡が、抉られた状態で30カ所見られる。こうした空襲を語り継ぐ平和問題などで解体が相次ぎ、全国でもわずか10例しか残っていない。

2007年4月、戦後復興の象徴であり、地域の心象風景として刻まれた給水塔を保存しようとした給水塔を保存しようとした「花房飛行場の戦争遺産を未来につたえる会」が発足した。市民見学会や講演会、平和を伝える証言会などを通して、県民に菊池飛行場給水塔の大切さを伝えてきた。活動に際し地域の方々から、

「平和と養生」をキーワードとして地域づくりの活動中である。給水塔を「平和と戦後復興のシンボル」として、私たちは戦争を一度と繰り返さないという原点の確認とともに、世代を超え戦争の記憶と平和を継承していかなければならぬ。



菊池市の市文化財に指定された菊池(花房)飛行場給水塔
=菊池市泗水町